

ラヴ・ミー・ドゥ

# Love me do!

*Mibaru & Junki*

---

麻生ミカリ

*Mikari Asou*

ternity



エタニティ文庫

その日は晴れた日曜日で、私は特に用事もないし、のんびりするつもりで、九時を過ぎてベッドの中でぬくぬくしていた。けれど、突然部屋の扉が開いて、ママの大声が飛んできく。

「美晴ちゃん、いつまで寝てるの！ 早く準備しないといけないのに……。さっさと起きて美容院に行ってきてちょうだい！」

な、何、どうなってるの。今日って、何か用事あった？

「何よ、ママ。今日、なんの日なの？」

「何ってお見合いよ、お見合い！」

はい？ もしかしてまだ夢の中なのかな？ なんで大学卒業を目前にして、お見合いなんてしなきゃならないのよ、やっと就職も決まったのに……

「いいから、早く起きなさい」

「えっ、ちょ、ちよっとっ」

1 ある晴れた日の災難  
　　〈美晴〉

羽毛布団をはがされて、私は慌てて起き上がる。お見合いって、そんなこといきなり言われても困る！

朝からお見苦しくてすみません。私、川嶋美晴、大学四年生。今年の春、大学を卒業予定で、就職先も一応大手商社に内定をもらっている。もちろん、このご時勢、たいした能力があるわけでもなく、学歴も平凡な私がそんな企業に就職できるのは、パパのコネのおかげ。パパはそれなりに名の知られた金融会社の社長をしているんだ。

恋人は、残念ながら今のトコロなし。大学までずっと私立の女子校だったんだもん。出会いがないのは私のせいじゃないんだから！ でもね、きっと就職したらステキな人と出会えるはず……なんて、信じていたのに。

「お見合いなんて、ヤダー！」

とは言うものの……。強引なママに逆らえるはずもなく、私は美容院に連れていかれ、馴染みの美容師さんにきれいなアップにしてもらう。そして、誕生日にパパが買ってくれたお気に入りのピンクのワンピースに、成人のお祝いとして祖父母からもらったパールのネックレスとピアスをつけた。

「まあ、美晴ちゃん、すごいかわいいじゃないの。さすが私の娘！」

ご機嫌なママをよそに、私は不機嫌極まりない。どんなにキレイな格好をしたって、

今から行くのはお見合いでしょ。別にまだ結婚なんてしたくないし、そもそもお見合いって結婚相手の見つからない金持ちの三十代男性とかが来るんじゃないの？ ……いやだ、そんなの。

「きつと、長嶺<sup>ながのね</sup>さんも気に入るわ。こんなにかわいいお嫁さん、そうそうもらえるもんじゃないものね」

「ちよつと！ お見合いに行くのは仕方ないけど、結婚するなんてひと言も……」

ん？ 今、長嶺さんって……？ もしかして、それって。

「長嶺さんって？」

「やだ、美晴ちゃん、あなた自分が就職する会社の社長の名前も知らないの？ お見合い相手は長嶺<sup>ながのね</sup>純希、社長の息子で、将来有望よ！」

長嶺総合商事株式会社。私が内定をもらっている会社で、パパがその社長とゴルフ仲間だつて聞いているけれど……。つて、そこから来たのか、このお見合い話はっ！

「やっぱりヤダ、お見合いなんて行かないっ！」

「何言ってるの、もう時間になるんだから、今さらそんなこと言わないの。ほら、パパもホテルで待ってるわよ」

ううううう、どうせ気持ち悪いオッサンとかが出てくるのよ！ 御曹司なんて若くてもせいぜい三十五歳とかじゃないの？ 私はまだ二十二歳なのにっ。

「まあ、美晴さんは四月からうちの会社にいらっしやるのね」  
 「そうなんですの。まだ何もできない子どももお恥ずかしいのですけれど、よろしくお願ひします。それに、この子つたらとつても奥手なものですから、今まで男性とお付き合ひをしたこともなくて」

「あら、女性はそのくらいの方がよろしくてよ」

お見合いって、本人同士はほとんど話さないモノなのかしら。ママは長嶺の奥様、つまり長嶺純希なる人の母親と意気投合して楽しそうに話している。そして肝心の長嶺純希は、無言でコーヒーなぞお飲みあそばしているのだけだ……。その容貌といったら、そんじよそこらの芸能人が、裸足で逃げ出すんじゃないかと思うほどの美青年。二十七歳だと聞いたけれど、もっと若く見える。色白で、奥二重の目は切れ長、鼻梁が細くて、顎のラインも細い。なんなの？　なんでこの人がわざわざお見合いなんてするの？　長嶺純希は私の視線に気づいたのか、こちらを見て少し微笑む。まるで、『お互い大変だね』と言うような笑みに、私はほっとして微笑み返した。そうよ、この人だって若いんだし、すぐに結婚したいわけじゃないでしょ！

「まあ、いけない。若いふたりが黙ったままでは、ねえ？」

「純希さん、美晴さんとお庭でも見てらしたら？」

「ええ、では少し歩きましょうか」

和風美青年、長嶺純希は、ゆったりと美しい所作で立ち上がると、私の後ろに回り、椅子を引いてくれる。一応私だって社長令嬢だし、多少のマナーは知っているけれど……。なんとなく、長嶺純希の優雅な動作に見とれてしまった。

お庭でも見てらしたら、とおっしゃいましたけど、まだまだ寒い一月、いくら若いふたりでも風邪をひきそうです。それにしても、長嶺純希は見れば見るほど優雅な人だ。なぜこんな人が、お見合いなんかしているんだろう。

「僕の顔に何かついてますか？」

「いえ、あの、きれいなお庭ですわね」

「そうですね。花もなければ雪もない、まったく見所のわからない庭ですわね」

はい？　なんかおかしくない、それ……。でもにっこり微笑まれるとツツコミにくい。

「あなたは僕と結婚してどうなりたいんでしょう」

大変美しい笑顔ですが、何かこの人、棘がある気が。いや、私だって別に玉の輿に乗りたいとお見合いに来たわけじゃないし、結婚なんてしたくないから冷たくされてもいいんですが。

「僕はあまり家庭的な人間じゃありませんし、あなたとお話が合うとも思えません。も

ちろんそれでも、あなたが僕と交際をなさりたいとおっしゃるなら、お断りはしません」  
 「はあ？ 別に結婚も交際もしてくれなくていいですよ。そもそも私はまだ二十二歳だし、結婚する気なんて毛頭ないんです。今回は親に言われて仕方なく来ただけなので、そっちから断ってくれるなら助かりますっ」

何よ、社長の息子だから知らないけど、わざわざお見合いして、相手が気に入らなかつたら嫌味な発言？ 感じ悪すぎ！ 別に私は身売りにきたわけじゃないっの！

「あれ、君もしかして……」

私の暴言に目を丸くした後、長嶺純希は私を見つめた。なっ、何よ、文句があるならばつきり言いなさいよねっ。ところが彼は私に向かって、軽く首をかしげて微笑んだ。

「じゃあ、君と結婚しようかな」

はい？ あなた今、なんておっしゃったんですかっ……？ 口を開けたまま、何も言えないでいる私に、長嶺純希は手を差し出した。

「恋愛を前提に結婚することになりました。よろしく」

それが、私の災難の始まりだった……

## 2 政略結婚に恋の字はない 純希

結婚するとかしないとか、はつきり言っただけのこととはどうでもよかった。けれど二十七歳にもなつて独身でいることに、母親が焦れていたのは知っていた。父は商社社長、祖父は会長、おまけに兄貴は三十二歳の若さで専務。経営も安定してるから、俺の結婚に社として何か期待があるわけじゃないし、そもそも兄貴はすでに結婚して子どももいるのだから、俺が急いで結婚する必要はない。

長嶺家の次男、という自分の立場はわかまえてはいるつもりだから、遊び相手には口の堅い女を選んできた。俺は恋なんて信じていない。タイミングや互いの要求が一致していることで落ちる『恋』なんて、所詮ただの錯覚。それを信じるっていう気持ちそのものも、やはり錯覚でしかない。そんなことに振り回されるのはまっぴらだった。

「だつたらお見合いなさい」

俺の持論を聞いた後に母親が言った言葉はソレだった。見合い？ この俺に見合いをしる。と。

「つまりは俺に見合うだけの女を用意してくれるってわけですね、母さん」

おもしろい、だったら俺に見合う政財界の令嬢をいくらでも連れてくればいいさ。俺はそのすべてに振られて、結婚できない男として母親の野望を潰してやろう。結婚なんて、しなくていい——。俺は、本気でそう思っていたんだ。

そして晴れた日曜日。本日の見合いは、父親の知り合いの娘らしい。金融会社の成金令嬢サマ。見た目はそれなり、アップにした髪も艶つやがあるし、姿勢もきれいだ。俺が微笑みかけると、彼女も品良く微笑み返してくる。

——これで十二人目、か。毎週のように見合いをこなして、いい加減女を見るのも嫌になっていた。いつそのこと、適当にどれかを選んで結婚したっていいのだが、どうもこいつもお嬢様の皮を被った馬鹿な女で、うんざりする。

わかりやすいのは、金と権力が好きな女。俺に結婚する気がないとわかると、あつさりと身を引いてくれる。そしてブライドの高い女も楽でいい。少し棘とげのある発言をするだけで、自らを守るために俺を『すっぱいブドウ』として片付けてくれる。厄介なのが、恋愛に夢見てる女。何考えてるんだか、俺の外見から『繊細で優しい人』というイメージを勝手に作り上げて、俺がそうではない面を見せると、自分は被害者みたいな顔をして涙目で俺を見る。

俺はもう本格的にうんざりしていた。だからその日も、川嶋美晴とかいう社長令嬢の釣書きなんて当然読んでいなかったし、いつもどおりふたりになつたらさっさと追い払うつもりだった。

——だが、川嶋美晴は、俺が不躰がじな言葉を吐くと、結婚する気なんて毛頭ない、とのもたまつた。なんだ、この女。この俺と結婚したくないとはいいい度胸だな。そう思った瞬間、去年の九月に採用面接に来たひとりの女子大生を思い出した。

ありきたりのリクルートスーツに身を包んだ彼女は、少し眠そうな顔で集団面接に参加していた。もともとコネで入社が決まっているからこそ、面倒くさそうにしているのだと思ひ、帰り際に声をかけてやった。

『君はもう入社が決まっているから、適当にやっついてもいいのかもしれないね。ほかの子たちはあんなに一生懸命なのに』

そう言うと、彼女は「何言ってるんだ、コイツ」という顔をして、俺を眺めた。そして、微笑んだのだ。

『何か嫌なことでもあったんですか？ 私なんか八つ当たりして気が済むのならいいのですが』

俺はそれ以上の嫌味も言えず、呆気にとられたまま、彼女の後ろ姿を見送った。ただ金持ちの家に生まれただけの、馬鹿な女子大生だと思っていたのに、いい切り返しだっ

た。そう、あのときの女子大生が、今、目の前にいる川嶋美晴その人だったのだ――

ああ、そうか。俺はやっと納得した。あのときの彼女だとしたら、俺を退屈させないでくれるだろう。どうやっても母親が俺の結婚を諦めないのならば、せめておもしろい女を選ぶまでだ。どうせ、俺は恋なんてできない――。十八歳のときの傷が、今も俺を苛み続けている。

俺はとびきりの笑顔を彼女に向けた。もちろん二十七年も生きているからには、自分のどんな姿に女性が喜んでくれるのかくらい把握している。

「じゃあ、君と結婚しようかな」

その言葉を聞いた瞬間、川嶋美晴は思いきり嫌な顔をした。そうか、そんなに嫌なんだ？ だったら絶対、君と結婚してあげるよ。

「恋愛を前提に結婚することにしました。よろしく」

俺が差し出した手を握り返すこともせず、彼女は呆然と突っ立っていた。

そして来週、俺たちは結婚する――

「長嶺さん、悪いんだけど勝手に大学に来ないでくれますか？ すごく迷惑です」  
卒業式にわざわざ来てやった婚約者に言うセリフとは思えないな。しかも恋の駆け引

きではなく、美晴は本気でそう思っているから素晴らしい。

「大切な婚約者を迎えにきて何が悪いのかな？」

「……それよ、問題は」

彼女の家の立場では、俺が結婚を望んでいるのを断るわけにもいかない。それなりに、自分の立場をわかまえている美晴は、断ろうという素振りさえ見せなかった。自分の立場をわかまえることぐらいできて当然だが、それができない女が多数いるのも事実だ。

「なんであなたが私と結婚したいのか、私にはさっぱりわからないんだけど」

飾らない話し方も、明らかに俺を好きではない態度も、結婚を本気で嫌がる姿も悪くない。女の、ポーズだけの嫌がる言葉なんて、もううんざりだった。

「さあ、なんでかな。君が俺を嫌がってるから？」

「……サイテー」

最低？ それで結構、君の旦那は最低男だ。それを最初から理解していれば、結婚生活はうまくいくんじゃないかな。

「美晴、レストランを予約してあるから早く乗ってくれるかな。君のご両親も来るんだよ？」

美晴は諦めたように俺の車に乗り込んだ。結婚を来週に控えているのに、まだ一度も手を出していない、俺の花嫁。お楽しみはこれからだ。せいぜい長く楽しませてほしい

ものだな。

「ほんっと、むかつく！」

「君は本当に楽しいね」

美晴と美晴の両親には、とうに告げてあるが、俺たちは披露宴もしないし、結婚したことを公表もしない。

『社会に出たこともないお嬢さんでは、将来共に社を守り立てていくことはできないので、まずは社会経験を積んでいただきたい。だがビジネス推進事業部長である自分と結婚していることがわかれば、普通の社会人生活は送れない。まずは結婚していることを伏せたまま、美晴さんには会社勤めをしてほしい。もちろん身内での結婚式はするし、その後も共に暮らして美晴さんを支えていきたい』

そう言った俺に、誰も異論を唱えなかった。まあ、俺の両親からすれば、結婚なんてしたくないとごねていた次男が結婚するのだし、公表しないにしても式をして、籍を入れるのだから許容範囲なのだろう。

美晴の両親は——母親は心配そうな顔をしていたが、父親はさすがにそれなりの会社の代表らしく、余裕のある笑みを浮かべて、

『美晴が将来何もできない奥様になるより、ずっといい。純希君、娘をよろしく頼むよ』と、即答した。

「何よ、こつち見ないでよね」

せつかくきれいな袴姿はかますがたなのに、美晴は苛立ちを隠さない。本当に、美晴を選んでよかった。もちろん、それは恋愛感情ではないし、美晴も、俺にそういうったものは求めていない。

「俺が俺の婚約者を見て何が悪いのかな？」

「運転転してるんだから、前見なさいよ！」

遊びがいのある、ゲーム。結婚なんて俺にとってはそんなものだった。

『恋愛を前提に結婚することにしました。よろしく』

確かに俺は彼女にそう言ったけれど、恋愛をするつもりなんて毛頭なかったし、できるとも思っていなかった。俺には誰かを信じてることなんてできなかったから。

### 3 きれいな顔には裏がアル 〈美晴〉

裏表の激しい御曹司。普段は優しくて穏やかで、所作もとても優雅だけれど、一皮剥けば、意地悪で口が悪くて。



結婚式の準備をしていたときも、ブーケを選んでる最中にいきなり耳元で――  
『そんなに憂鬱そうな顔をしていると、ここで無理矢理キスするけど?』

囁く声は優しいけれど、その内容はひどすぎるっ！確かに私はロマンティックな恋物語に憧れるタイプではない。けれど、ファーストキスぐらい多少の夢を見た方がいいはずだ。だけどこのまま行くと、その相手はあのアクマってことになるのよね。

「あーっ、もうやだっ、考えるだけでイヤっ!」

そのとき、携帯にメールが入る。アクマからの、連絡。

『今から迎えに行くから準備して』

……どこに行くのか、何をするのかも教えないで、どう準備すればいいのよ！しかも今から？ アクマの勤める会社からここのまで、車で二十分もかからない。やばい、急がないと。私は慌てて化粧を直して、クローゼットから春物のワンピースを引っ張り出した。

「で、ここはどこなわけ?」

私は長嶺純希に連れられて、とある新築マンションの地下駐車場にいた。

「美晴の新しい家だよ。この前言わなかったっけ」

「聞いてない!」

やれやれ、と肩をすくめると、アクマは私の肩に腕を回してきた。勝手に触れないでよ、こっちはあんたが遊んできた女とは違うのよ！父親以外の男性とこんなに近づいたことなんてないんだからっ。

思い切り振りほどきたい衝動を、私はにつこりと微笑んで堪える。だつてそんな行動を取ったら、アクマの思うツボ。仕返しに何をされるかわかったものじゃない!

「美晴がおりこうになってくれて、嬉しいような寂しいような複雑な気持ちだよ」

「……」

どうしろと! アクマの感情は人間には到底理解できません……

マンションの最上階。二十二階からの眺めは絶景。室内の内装と家具は、きれいかつシンプルにまとめられていた。

「……なんで?」

「ん?」

「なんで、内装も家具も、全部勝手に決まってるのよ!」

確かに色調も揃っているし、必要なものはすべてある。冷蔵庫も食器も、掃除機も、室内用洗濯物干しも、果ては調味料に、クローゼットの中には服に帽子にバッグ、引き出しを開ければ見たこともないセクシーな下着……!?

「美晴は結婚式の準備で忙しいから、俺が揃えておいたんだけど？」  
 じゃあ、この黒い、ほぼ紐状のパンツはあんたが穿くのね!?

「これなら、美晴はほとんど荷物を移動しなくても暮らせるだろう？ 実家には美晴の部屋をそのまま残してもらえばいい」

「……ひとつ尋ねたいんだけど」

「うん、なんだい？」

「それってもしかして、気遣いなのか？」

思わず私は、背後に立つ長嶺純希に問いかけた。これで、私が喜ぶと思ったのだろうか。もし、もしも、何かの間違いでアクマがそういうつもりでやってくれたのなら、感謝の意を示さなくてはならない。私だってそのくらいの礼儀は持ち合わせている！

「いや？ 俺がこうしたかったからだよ」

「わかってたわよ……」

さらに追い討ちをかけたのは、ベッドルーム。4LDKは、この年齢の新婚夫婦には豪華すぎるし、感謝する気持ちは私にだってそれなりにあるのよ？ だけど……

「このくらい大きければ美晴がどんなに転がっても落ちないよ」

「……そうね」

ワイドダブルのベッドは、低反発マットレスで、体のためにはいいのでしょうよ。だ

けど、ワイドダブルってことは、一緒に寝ろってことよね!?

「長嶺さん!」

「何？ 寝心地試してみたい？」

「違いますっ」

動揺している私を見て、とつても嬉しそうなこのアクマ！ 私が言いたいことなんて、どうせお見通しなんでしょう？

「結婚するのはもう仕方ないし諦める。でも、私たちお見合い結婚なんだし、いきなり一緒に寝るのはどうかと思う!」

「平安時代は、初めて会って暗くて顔も見えないままで、床を共にするくらいのこと、日本人はしてきているはずだけど」

「私は平成の人間ですっ」

今にも嘔みつきそうな私の頭をぼんぼんとたたいて、アクマは美しく微笑む――

「なんなら、今すぐ楽しんでみてもいいんだよ?」

……今すぐ、舌を噛みたい気持ち。

#### 4 所詮私はアクマの花嫁？ 〈美晴〉

結婚式も無事（？）終わり、新婚旅行は先送りになっていたので、とりあえず新居へと移動する。車を運転する長嶺純希は、何事もなかったように、平然としている。

……私のファーストキスうううう！ 悔しい、今すぐ口をはずして新品と交換したい！ だけど、彼の唇は優しくてやわらかかった……。思い出してしまった自分を叱りつける。もう一生思い出したくない。不覚だった、アレは。

「何、百面相してるの」

「……なんでもない」

「俺とのキスがそんなに印象深かった？」

的確な指摘に、思わず顔が赤らむのがわかる。なんでこんな男と結婚しちゃったんだろう！ 三秒以内に離婚したい……

「美晴は嘘つきだけど、正直だね」

「嘘つきなんて、長嶺さんだけに言われたくないですけど」

どう考えても稀代の嘘つきは、あんたでしょ！ そのおきれいな顔も、やわらかい雰

囲気も、優しい微笑みも、全部が嘘をつくために駆使されているじゃない。私なんて、マナーのための調整程度だよ……

「ところで、いつまで長嶺さんって呼ぶつもり？」

確かに、いつまでも夫である人を苗字で呼ぶのはおかしいってわかっている。だからって、どう呼べと？

「君もすでに長嶺さんのはずだけど」

笑いを噛み殺しているみたいな声に、私はぶいっと顔を背ける。

長嶺美晴——。それが、今日からの私の名前。でも、仕事では川嶋を名乗るんだし、会社でもし会ったときに、いきなり名前を呼んだりしたら怪しまれちゃうでしょ！

「今後のことを考えれば、長嶺さんって呼んでたほうが便利でしょ」

「つまりベッドの中でもそう呼んでくれるってことかな」

頭の中が真っ白になる。結婚するということはそういうコト。それでも、一般的な結婚とは違うんだし、カラダの関係は免除してもらえない、そう思ったかった。

「先に聞いておくけど、今夜は当然してくれるんだよね？」

「し、しない……」

「妻の務めでしょ。俺の性欲を受け止めるのも」

性欲って！ あのね、普通の夫婦は性欲のために夜の営みをするわけではないと思う

の！愛情からくる行為でしょう。泣きそうなくらい、絶望的な気持ちでいる私を横目で見て、長嶺純希はくっくつと笑う。何が楽しいのよ、このアクマ！

「いいよ、しなくて」

「いいの？ 本当に!? どうせまた、喜ばせておいて何かたくらんでるんじゃないの……?」

「いずれさせていただけると嬉しいですけど、ね？」

わざとらしく優しい笑みを浮かべて、彼は私を見る。その笑顔の裏にアクマが潜んでいるようにも、しなくていいならそのほうがいいつ。

「その代わり」

「そ、その代わり……?」

「純希って呼んでもらおうかな」

い、いきなりソレ？ 名前っていうのは大切なものだし、これまでの「長嶺さん」という呼び方にも愛着があつて！ ……でも、代わりにしなくていいっていうなら、努力するしかないのだけど。

「ほら、呼んでみて」

「じゅん、き」

「もっと」

「純希っ」

「はい、合格。これからはそれでよろしく」

左手をハンドドルから離して、純希は私の頭を撫でる。これってもしかして馬鹿にされてる!?

マンションに到着して、私はやっと息をついた。結婚式だけで、十分緊張したんだから！ 今夜はゆっくり眠ろう……

「美晴、お風呂入る？」

「うん！」

お風呂、大好きですっつ。ゆったりお風呂に入れば、気持ちも落ち着く、……よね？  
——ところが。

「あの、何してるの」

「ん、美晴とお風呂に入ろうかと思って。ほら、美晴も早く脱いで」

「やっ、やだ！ しないって言ったくせに！」

「しないよ？ でもスキんシップは必要でしょ。これからふたりで暮らしていくんだから」

「絶対やだあああああ」

ギリギリの妥協により、お互いきっちりタオルを巻きつけた状態で一緒にお風呂に入ることになった。

「別に襲うつもりはないんだけど。俺がそんなにガツガツした男に見える？」

「だったら一緒にお風呂に入る必要なんてないじゃない……」

「どうせ寝るときも一緒なのに。第一そこまで距離をとって、結婚生活ってやっていくのかな」

……そう、ベッドはワイドダブルサイズの大きなベッドがひとつだけ。床で寝ると言うのは簡単だけど、今日からずっと私はここで暮らしていかなくちやいなんだ。それを考えれば、この極悪御曹司の隣で眠ることに慣れなければならぬ。

湯船に浸かって、体が触れないようはじっこに寄っている私に、純希が右手を伸ばす。……私は、このマンシヨンの値段だって知らない。両親のもとで、何ひとつ不自由なく暮らしてきたから、これから自分で生活を築いていけるのかも自信がない。しかも、夫である純希は私を愛しているわけでもなく、ただおもしろそうだというだけで結婚を決めたのだ。

「何、泣きそうな顔してるの」

「触さわらないでってば！」

けれど私の抗議もむなしく、純希は私の頬に指先で触れる。濡れたあたたかい指。本当に、本当に不安でいっぱい、私は涙を堪こらえられなくなってしまう。涙がこぼれる直前に、両手で顔を覆うのが精一杯。政略結婚なんて、よくあることだってわかってる。

それでも少しくらい、私に心の整理をする時間をくれたっていいじゃない！

「よしよし、今日はお疲れさま」

純希は私を胸に引き寄せて、信じられないくらい優しく髪を撫でる。

「大丈夫、約束したからね。何もしないよ」

「うるさいなっ、あなたが全部悪いのに、優しくなんかしないでよっ」

「うん、ごめんね」

全然悪いなんて思っていないくせに、アクマは私に囁ささく。

「美晴は、俺を敵だと思ってるのかもしれないけど、そうじゃないよ。これからは俺が美晴の一番の味方になったんだ」

何が、言いたいわけ？ どうやったら、あんたが私の味方だなんて思えるのよ。

「とりあえず、先上がるから。美晴はゆっくり体を休めて」

返事もしない私を置いて、純希はシャワーで体を流すとバスルームを出ていった。ほととずるはずなのに、なぜか少し寂しい気持ちになるなんて、今日の私は本当に弱ってるんだなあ……

川嶋美晴、本日より長嶺美晴になりました——

5 愛しの姫にお仕置きを (純希)

美晴をバスルームに残して、俺はひとりで先に部屋に戻る。濡れた髪をタオルで拭いて、冷蔵庫からビールを取り出すと、今日の美晴の姿が脳裏に浮かんできた。ウェディングドレスに身を包んだ美晴の、キスされた瞬間の驚きに満ちた顔——。白い肌が、一瞬で赤く染まり、美晴は俺を突き飛ばした。

『し、しし、し、信じられないっ』

美晴がキスもしたことがないなんて、俺からすればそっちのほうが信じられないことだったけれど、子どもの頃から私立の女子校に通ってきたお嬢様だし、あの性格だから安易に男と付き合うこともなかっただろう。ぱつと見、細くて華奢で色白で、儂げなお嬢様に見える、彼女——

初めてのキスは、誓いのキスではなく、俺だけがこっそり楽しむようにしよう、と決めていた。本当ならば、帰宅してからするつもりだったのに、俺も堪え性がないもん

だ。思い出して苦笑してしまう。

両親や祖父母から離れたところで、美晴が冷たいミネラルウォーターを飲んでいる姿を見たとき、その細い体を自分のものにしたいと願ってしまった。もちろん、今夜は許してやるけれど、あときはウェディングドレスに身を包んだ美晴を、この腕に抱きしめたくて我慢できなかった。緊張した表情の美晴の隣に立ち、家族がそばにいないことを確認して……

『美晴、口紅がはみ出てるよ』

そう言って、俺は彼女の頬に手を添えた。美晴はおとなしく、触れられるままだった。右手の親指で、彼女のやわらかそうな唇に触れる。本当は、口紅なんてはみ出でなかったのは、わかるだろ？

『……っ、んっ』

そのまま、強引に唇を重ねた。最初から触れるだけで済ませるつもりはなかったから、甘い唇を割って舌を差し入れた。美晴は最初、俺を押しつけようと腕に力を入れていたけれど、舌を絡め取ると、体の力がどんどん抜けていって——。最後には、俺の黒いモニターリングコートを震える指でつかんでいた。たっぷり味わって舌を抜き出し、俺は最後に音を立ててチュッと美晴の唇を吸った。

真っ赤になった美晴の唇からは、口紅がほとんど落ちていたのだけれど——。そして、

俺を突き飛ばし、あの言葉をのたまったってわけだ。

パタパタとスリッパの音がして、振り返ると洗面所から美晴が出てきたところだった。上気した赤い頬、乾かしたばかりのやわらかそうな髪。

「美晴、ビール飲むなら冷蔵庫にあるよ」

俺が声をかけると、美晴は少し戸惑ったように俺を見つめてから、ふいと顔を背けた。「別に、飲みたいときは自分で飲めるんだから、気にしないでいいしっ」

意地っ張りな、俺の奥様。でも今日キスした瞬間の君はかわいかったから、俺は十分満足してるよ？

「それより、なんでまともなパジャマがないのよっ。実家からやっぱり持ってくるべきだった……」

美晴はかわいらしいピンクのベビードールに、揃いのショートガウンを羽織っている。もちろんそれは美晴を選んだわけではなく、この部屋を整えるときに俺が選んだもので。「似合うからいいんじゃないかな」

「こんなの似合いたくないっ」

白い足が、膝上十五センチくらいまであらわになるそのベビードールは、美晴に実際よく似合っているのだけど、彼女は不機嫌そうにしている。

「あんまり反抗的だと、キスしておとなしくなってもらうけど？」

「……サイテー！ 脅迫するなんて、サイテーすぎるっ」

「あ、そういうこと言うんだ？」

「長嶺さんだって、今日は疲れたでしょ。早く寝るべきだと思うっ！」

「……長嶺さんって誰のこと？ 俺？ それとも美晴？」

はっとして、美晴が口元をおさえる。それとちようど同じタイミングで、後ずさった美晴の背中が壁にあたった。準備は整ったね？ 俺は、かわいい獲物を前ににっこりと微笑む。

「純希って呼ぶのは、何を免<sup>まぬ</sup>が<sup>が</sup>るための約束だったか、忘れたのかな？ 俺の奥様は」

「ちよ、待って、待って、純希、純希さんっ」

逃げようとする美晴を腕の中に閉じ込める。じたばた暴れる体から、ふわりと柑橘系の香りがした。ボディソープの香りだろう。

「そんなに俺に抱かれないの？」

「違うっ」

「わざわざ長嶺さんなんて呼ぶから、お仕置きしてほしいのかと思ったのに、残念だな」わざと耳元で、美晴の髪に唇をつけながら話しかける。美晴は俺の腕に閉じ込められ、身動きできないのに、それでも抵抗しようとしていた。

「やだやだ、離してよっ」

「だから、美晴はわかってないなあ」

「何がよっ」

俺は腕を緩めて、彼女の顔を上げさせる。美晴は強い視線で俺を睨んだ。そうそう、そういう目が悪いんだよ？

「抵抗されると、蹂躪じゅうりゅうしたくなっちゃうってことだよ？」

優しく美晴の背中を撫でる。俺の今の一番のお気に入り。かわいい美晴。だけど結構賢いはずの美晴。俺の言ってる意味は、わかるよね？

「……き、気をつける、から」

「そうだね、気をつけて。じゃないと狼に食べられても文句なんか言えないよ」

「たった一回じゃない……」

不満そうな彼女に、俺は微笑んだ。

「そうだねえ。じゃあ俺もたった一回なら美晴のこと抱いていいのかな？」

「……ゴメンナサイ」

なんとかしてソレから逃げようと必死な美晴。結婚したってことは、いずれは必ず抱かれるって、まだわかっていないのだろうか。彼女を手に入れる日に思いを馳せて、心が震える。

「仕方ない。今日は疲れてるだろうし、見逃してあげるよ？」

俺がそう言うと、美晴はパツと明るい顔を上げた。わかりやすすぎて、笑いそうになるのを必死で堪たえる。

「でも」

俺は美晴の表情を楽しみたくて、わざと言葉を切った。

「……でも？」

不安そうに美晴が俺を見つめる。それなりにきれいな子なのは、間違いない。令嬢っぷりも板いたについている。それでも俺に翻弄はんろうされてしまう美晴、かわいそうにね？

「お仕置きは必要だよね」

指で、美晴の頬にかかっている髪を払う。美晴は戸惑いの表情のまま、俺を見上げていた。

「さ、美晴、今日の復習を兼ねてもう一度キスしてみようか？」

「やっ、やだっ」

「やじゃないでしょう？ 君が悪いんだから仕方ない。ほら、目を閉じて」

「待って、待って純希、なんかほかのお仕置きにしよう？ だって、キスってそういうものじゃないよ。お仕置きするためにキスするなんて変よね!？」

必死に俺を説得しようと、美晴がまくしたてる。別にほかのお仕置きでもいいけど、



そつちのほうが美晴は困るんじゃないのか？ 俺は堪え切れず、クックツと喉から笑いを漏らした。

「じゃあ、朝まで俺に抱きしめられて眠るのとどっちがいい？」

俺の奥様は、絶望的な表情で己の無力さを噛み締めておられました——

## 6 アクマの隣で目覚めたら ～美晴～

——睡眠不足、だ。本格的に体が重い……。そもそも、人と一緒に眠るなんて私は慣れないのよ。あのアクマはきつと、相当な数の女性と眠ってきているんでしょうけどね！

それでも、一応自分が新妻であることは自覚している。結局アクマの要望どおり抱きしめられたままで眠ったせいで、体はどこもかしこも強張っていた。私は純希を起こさないように気をつけながら彼の腕の中から抜け出す。朝食の準備をしなくては。ベッドのわきに立って見下ろすと、眠っている純希は、常にまとっている、人を近づけないオーラがみじんもなく。なんだかいつもより、かわいく見える。

起きて一番最初にしたことは、着替えだった。いくら私でも、あんな恥ずかしいペビードールのまま、朝食の準備なんてしたくない……。クローゼットの中にたくさん入っていた服の中から、比較的地味なニット素材のグリーンのワンピースを着る。……まあ、地味に見えてもあの純希が選んだのだから、それなりのお値段がするブランドなのもわかっていけるけれど。

あの極悪御曹司の金銭感覚は、どうなっているんだろう。確かにうちみたいになちよと裕福程度の家とは違って、長嶺のおうちはそのごくお金持ち。それでも彼は一応家を出て、ただの長嶺純希として会社勤めをしているんだし、あんまり贅沢ばかりはしてられないんじゃないのかなあ。私はそんなことを考えながら、台所に立った。

ふふ、ふふふふ。

思わず笑い声が漏れそう……。ダイニングテーブルに並んだ朝食を見て、私はうんざりしてしゃがみ込んだ。……だから、結婚なんてしたくなかったのに！ 大学在学中から、お料理教室に通っていた女の子たちを尊敬する。

テーブルに並んだ料理は、焼きすぎて固くなった目玉焼き、油でギトギトのベーコン、かろうじて普通に見えるけれど味に自信のないコンソメスープ、レタスをちぎっただけのサラダ、不恰好に刻まれた果物が入ったヨーグルト……

料理なんて苦手だし！ どうせあのアクマのことだから、私が料理もできないのを見

て喜ぶのよ。じゃあ喜ばせてあげればいいじゃないのっ。

もう、今すぐここから脱出したい。そしてママが準備してくれたおいしい朝食を食べたいよ。

「おはよう、美晴」

そのとき、アクマがベッドルームからダイニングにやってきた。

「お、おはよう」

「へえ、朝食作ってくれたんだ？」

「……できれば食べないでほしいんだけど」

「なんで？ 美晴がせっかく作ってくれたんでしょ？ 俺のために」

朝からおかしいくらいにこやかな純希は、パジャマのまままで椅子に座る。黒いやわらかな髪は、少し寝癖ではねていた。アクマな旦那様にも人間らしい部分があるのね。

どうせ文句を言われるのだろうと思っていた朝食。だけど、純希は何も言わずにテーブルに並んだ料理を全部食べた。マズいと言われるのか、あるいは嫌味つたらしく「美晴はお料理も上手だね」なんて言われるのか、と心配していたのだけど……。いや、何も言われなかったことに、わざわざ不安になる必要なんかないっ。

……こうしていると、確かに物腰もやわらかいし、優しいし、顔だつてきれいだし、お金持ちだし、モテるんだろうな、なんて思ってしまった。でもコイツはアクマなの

よ!? ほだされちゃ駄目、どうせこの極悪御曹司は、自分になびかない私がおもしろいからかまっているだけなんだし。そう、私よりも純希を好きになったら、悲しいことにはならない。愛してくれない人を好きになるなんてつらいだけだって、恋愛経験のない私にだってわかるもの。

「朝食ありがとう」

チュッと音を立てて、純希は私の額にキス、しやがった。

そんな嫌がらせ、朝っぱらからしなくていいですっ！

## 7 マホウノコトバ 純希

美人は三日で飽きるがブスは三日で慣れるらしい。そもそも俺は、女性の美醜びしゅうを外見のみで判断する人間を、あまり好ましく思っていないのだけど、ね？ ちなみに、我が奥様はどちらかといえば美人に分類されると思うのだけど、三日で飽きもせず、かといって慣れもしない。

「いい加減ひとりでゆっくりお風呂に入りたいんですけど！」

結婚式以降、お風呂には毎晩必ず一緒に入っているのに、美晴は毎晩必ず同じ苦情を

口にする。

「どうしてもひとりで入りたいときは、仕事が始まるまでの間なら、日中に入ればいいよね？」

「横暴……」

「そんなに褒められると照れるよ？」

ぶくぶくぶく、と鼻の上までお湯に浸かって、美晴は恨めしそうに俺を見上げる。そんな壮絶にかわいい顔しないでよ。ますますいじめたくなくなるでしょうに。

相変わらずきつちりタオルを巻いて、間違っても落ちたりしないようにダブルクリップでとめた状態で、美晴は俺と一緒にバスタブの中にいる。白い肌はあたたまるとすぐに赤くなる。濡れた前髪を、細い指がかきあげる。そして、まっすぐに俺を見つめて、美晴は口を開いた。

「あのね純希、相談があるの」

珍しい。美晴が俺に相談？

「何かな？」

「お料理教室に通いたいんだけど……」

大変言いにくそうにそう伝えると、美晴は少し視線をそらした。確かに美晴は料理がうまいとは言えない。それでも冷凍食品やレトルトを使わずに、一生懸命作ろうとして

くれている。実は、そのことで俺は少し美晴を見直していた。料理が下手なことを馬鹿

にしているわけじゃない。俺の母親は旧家の出身で、着飾ることや出かけることが好きな人だ。そのせいか、母親が食事を作ることはほとんどない。実際、実家の食事はシェフが作っているし、母親が作ったものを食べた記憶といえば、子どもの頃にクッキーを焼いてもらったことくらいだった。俺の今の収入で、シェフを雇うわけにはもちろんいかないけれど、それでも有名店のテイクアウトや、デパートのお惣菜でごまかすことは簡単だ。なのに美晴は、下手なりに努力して料理をしていた。

「少し仕事に慣れてから、平日の夜のクラスに行ってもいい？」

「いいよ」

俺が頷くと、美晴は嬉しそうな顔をした。なんだ、本当に素直な子なんだな。

「じゃあ、俺からもそろそろきちんとした取り決めを話してもいいかな？」

「え、取り決めって……」

「ここで話すことでもないし、上がってからワインでも飲もうか？」

美晴との結婚について知っている人間は社内でもわずかだ。上層部のごく一部の人間には、父から告知がなされており、結婚祝いも届いている。それと、美晴の直属の上司となる秘書課課長の竹下氏にも説明済みだ。ただし、特別扱いはしないよう、きちんと言えてある。まあ、美晴が驚くのが楽しみなので、仕事に関して説明するつもりはない

けれど。

「それで、取り決めって、なんなの」

心配そうな表情で、美晴がワイングラスを手にする。先日結婚祝いにもらったグラスだ。ワインは、昨日美晴と買い物に出た際に、青山のワインショップで見繕った中の一本。二十本ほどまとめて購入した俺に、彼女は少し驚いていたようだった。

「そうだね。俺たちの結婚生活について、いくつか決めておかないといけないこと、かな？」

赤ワインをひと口含む。以前にも何度か飲んだことのあるものだけれど、芳醇ほうじゆんで酸味も強く、力強い味だ。

「俺から提案することは三点。これは提案と言っているけれど、もう決定事項だと思っ  
て聞いてほしい」

言いながら、なんだか仕事か仕事かみたいな口調になってしまったな、と思う。湯上がりの美晴は、小さく息を呑んだ。

「まず、毎朝毎晩必ず愛してると言うこと」

「……はあ？」

あまりに気の抜けた返事に、俺は思わず笑い出してしまった。いやー、美晴はそっけないわりにいいリアクションをするね。

「……それは、私が言えはいってことなのね」

「そうだね。美晴は毎朝俺に愛してると言ってる。夜は俺が美晴に愛してると言うよ」

「攻略結婚に、愛なんか必要ないんでしょ？」

美晴の精一杯の皮肉にも、俺の耳はまったく痛まない。につこりと微笑んで、美晴の肩に手を載せる。

「攻略結婚だからって、愛をはぐくんではいけないなんて決まりはない、ね？ それに、将来生まれる子どものためにも、家庭に愛があるのは大切なことだよ」

「こ、子どもって」

「そう、いざれ美晴には俺の子どもを産んでもらわなくちゃならないから」

今すぐ逃げ出したい――。そんな思いをばつちり顔に出している彼女がおもしろくてたまらない。なんて素直な俺の奥様。

「……とりあえず残りのふたつを聞くわ」

「前向きな対応をありがとう」

結婚していることを周囲に明かさないと、結婚生活を何より第一にすること。残りのふたつを伝えると、美晴は真剣な表情で頷いた。

「あの、最初の項目だけ、明らかにほかと温度が違うと思うのだけど」

やはりそれが気に入らないらしく、唇を尖らせる。

「美晴は俺のことをサイテーの極悪非道、鬼畜の女たらし、アクマとも思っているのかもしれないけれど」

美晴の目がかすかに泳ぐ。……見事、大当たりか。確かにあまり事実とずれていないけど、ね？

「俺はそれなりに美晴を気に入って結婚したわけだから、愛のある家庭を築いていきたいと思ってるよ？」

「……絶対、私で遊んでるだけだと思っけど」

的確すぎて、もう我慢できない。俺は声をあげて笑い、額に手をやった。

「まあ、それも認めるよ。でもそういうことを踏まえても、美晴とうまくやっていけるように、考えているってこと。だから必ず毎朝美晴は俺に愛してるって言って。俺は毎晩言うから、ね？」

美晴は大きいため息をついた。頭の回転も悪くないし、状況への適応性もある。それなのに俺のことだけはどうしても受け入れられない美晴が、かわいくて仕方ない。今まで、女に本気で拒まれたことなんてなかったせいもか逆にかまいたい気持ちでいっぱいになってしまふ。

「あ、それともうひとつ、どうして結婚指輪をつけてないのかな？」

「だって、結婚していることは内緒にするように、って」

「だとしても、左手の薬指にリングをつけることは、特別な恋人がいるってアピールと必要なことだよ。特に女の子の場合ね？」

美晴の白い指には、ひとつもリングがつけられていない。その手を握って、薬指の付け根あたりを親指で撫でる。

「ちよつと、くすぐりたいから！」

「ここに、俺からの愛の証をちゃんとつけておいて、ね？」

「愛の証って！ そんなんじゃないでしょ、純希は私で遊んでるだけのくせにっ」

「うん、そのとおりだけど」

君が思うより、俺は意地悪で腹黒い。だけど君が思うより、君は素直で誠実だから。

そんなかわいい君のために、俺がしてあげられることは？ 君の思いどおりにならない未来を、君に届けてあげることくらいかな。

## 8 暗雲ただよう配属先 〈美晴〉

入社式の朝、私は新しいグレーのスーツに腕を通す。相変わらず、あまり上手とは言えないけれど少しはマシになって……きていいいな、という程度の朝食を、純希と

食べる。

「今日から美晴も社会人、か」

サラダをフォークで口に運びながら、アクマは感慨深げに目を閉じる。このマンションで純希と暮らし始めて二週間が過ぎたけれど、純希は朝晩の「愛してる」と、毎晩一緒に入浴すること以外は、特に何かを強要することもなく、私はわりと快適な生活を送っていた。

「社内では、川嶋さんだね。そのほうがまだしっくりくる、かな？」

「そもそも、長嶺を名乗ることがほとんどないもの」

結婚したからといって、特に長嶺を名乗る機会はなかった。純希との結婚は対外的にはほぼ秘密にしているし。

「美晴は何時に出るの？」

「九時半から式だから、八時五十分くらい」

「俺は今日早めに行くから、気をつけて行くんだよ」

「……今日は、って、別に明日からも純希と一緒に出勤するわけじゃないんだから！」

「それはそうだけど、ね」

今日の純希は、薄いグレーのワイシャツに、黒を基調とした細いネクタイ、濃いグレーのスーツを着ていた。本当に、スタイルがいい人だと思う。顔そのものも確かに整っ

ているのだけれど、純希の場合は全体の雰囲気、ものすごく優雅なのよね。

「美晴？」

名前を呼ばれて顔を上げると、純希はもう準備を終えて、出かけようとしていた。

「あ、ごめん、ちょっとほーっとしてた」

「いいよ、俺に見とれるのは仕方ないから」

「……違うし」

一応旦那様の出勤の際は、玄関でお見送り。玄関までついていくと、靴を履いた純希が振り返る。そう、ここで必ず必要な言葉があつて……。純希は何も言わず、私を促す。視線だけで、人を動かそうとするな！

「あ、いしてるよ、純希」

「うん、ありがとう」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます。美晴も今日は頑張つて。薬指のリング、はずさないように、ね？」

純希は満足して玄関を出ていく。どうしても、この朝の必須事項「愛してる」だけは慣れない。あのアクマは言い慣れてるらしく、毎晩眠る前、簡単に口にしてくれるけれど！ 私はいつと違って、恋愛経験もないですからからねっ。

「さて、私も準備していかなくっちゃ」

入社式が終わって、配属発表を受けて。

——私は、自分の配属先にかなり危機感を感じていた。

秘書課。……秘書って、ナニ。いや、意味はわかるけど！ 私ははっきり言って、英語が堪能なわけでもないし、秘書検定何級とやらを持っていてるわけでもない。なぜに、私が秘書課！ これがあのアクマの陰謀なのだろうということはわかっていただけ……

私が入社した、つまり純希のいる長嶺総合商事株式会社では、部長職以上の人にはそれぞれ担当秘書が付く。なので秘書課に配属されているからといって秘書業務だけを覚えればいいというわけではなく、それぞれの担当役員の業務内容について専門的な知識を身につける必要があるらしい。しかし、秘書課なんて、きつと鼻持ちならないお姉さまたちの掃き溜めなんじゃないだろうか。

私の不安は当然的中した。何を考えて、純希は私を秘書課になんて配属したんだらう……

秘書課がある七階でエレベーターを降りるとすぐに、フロアの雰囲気はほかの階と違ってることがわかった。営業や総務、システム管理課などは、人の声が絶えず聞こえ

ていて、比較的騒がしい雰囲気だったけど、七階のフロアはしんと静まり返り、どこからか花の香りがしていた。

「川嶋くん、こっち」

秘書課課長である竹下課長——五十を少し過ぎたくらいのも、穏やかというか人畜無害というか、なんとも華やかさから遠い上司に連れられて、私は秘書課に足を踏み入れる。竹下課長は私と純希の関係を知っている、数少ない人。彼は先ほどそれを説明して、私みたいな新入社員に丁寧な頭を下げてくれた。

「純希さんは大変聡明で実力があり、社内でも信望の厚い方です。今後業務にあたって、川嶋くんに対しても、ほかの社員同様に対応するよう指示を受けているので、よろしくお願いします」

……はい。なんの実績もない、ただの新入社員の私がほかの社員と同様に扱われるのは当然のこと。それでも、こうしてひと言断ることが社長の家族である純希の妻への配慮なのだろう。

「あら、今年はずいぶん貧相な方がいらっしやったのね」

「仕方ないわ、能城さん。川嶋さんはコネ入社なんですもの。そうですよね？」

挨拶すらすらする前に、いきなりゴージャスな巻き髪の女性と、ショートカットの爽やか

な笑顔の女性が見て話し始める。

「ほら、君たち、川嶋くんに挨拶してもらおうから、静かに」

十名ほどの女性が、着席して私に注目する。それにしても、驚くほど華やかな人ばかり。秘書課って、そういうものなの？

「川嶋美晴です。本日付で秘書課に配属されました。入社したばかりでわからないことも多いと思いますが、よろしくご指導ください」

頭を下げると、ささやかな拍手が起こる。もう、嫌な予感しかないんだけど……

「川嶋くんはしばらく、品川くんの下についてビジネス推進事業部長の担当をしてもらいます」

……なんか、聞いたことのある役職なんですけど？ 間違いだと思いたい。だって、それはあのアクマの役職ですよ？

「課長、長嶺部長の担当は、昨年からずっと私が」

さっきのショートカットの女性が立ち上がる。けれど竹下課長は、それを制して言葉が続けた。

「担当に関してはビジネス推進事業部から、正式な依頼をもらっています。長嶺部長のご意向ですので変更はできません。川嶋くんも、いいね？」

今の私に苦笑以外できることがありますか、神様。さっきは爽やかな笑みを浮かべて

いたショートカットの女性が、いかにも悔しそうに私を睨んでいる。あの、できれば純希の秘書なんて、やりたくないんですけど……

「しばらくの間は、品川くんに指導をしてもらおうようにね」

「はい」

「品川くん」

肩までのゆるいウェーブの髪を揺らして、ぱっちりした目の女性が立ち上がる。

「川嶋くんのこと、よろしく頼みますよ」

「はい、了解いたしました」

少し低い声、大きなアーモンド型の目、形の良い赤い唇。秘書よりも、モデルのほうがいいと似合いそうな品川さんは、私にっこりと微笑んだ。

「私、指導に関しては少々厳しすぎる点もありますが、川嶋さんどうぞよろしくお願いいたしますね」

「よろしくご指導ください」

絶対、いびられる……

「川嶋くんの席はその窓際のデスクです。あとは品川くんから説明を受けて、明日から業務に就いてもらいます。皆さん、よろしくお願います」

竹下課長がそう言うと、上品な声がそろって「よろしくお願います」と響く。



私、ここでやっていけるのかしら……

社外人初日、早くも暗雲が垂れ込め、頭上は真つ暗だった。

帰宅して、夕飯の支度をしながら、私は純希の帰りを今までにないくらい、待っていた。問いただしたいことで頭の中がいっぱいなよ！　ほんつつつとうに、アイツの秘書なんて遠慮したいってば！　秘書課のお姉さまたちは、私が純希の担当になったことに大変ご立腹で、まともに話すらしてくれない。あんな中で、どうやって仕事をしていけばいいのよ、ほんと！

失敗せずになんとか作れそうな、鶏肉の白ワイン蒸しを準備して、温野菜のグリルをオーブンに入れたとき、玄関のドアが開く音がした。私は小走りですぐ玄関へ向かう。

「ただいま、美晴。わざわざお出迎え？」

「ただいまじゃないわよっ！　何よ、秘書課って、なんで私があんたの担当なのよ！」

「そんなに喜んでくれるなんて、嬉しいな」

「喜んでなんかないっ」

「まあ、落ちついて。それよりずいぶんいい香りがしてるね」

私の怒りなんてまったく気にせず、純希は靴を脱ぐと私の横をすり抜け、ダイニングに向かう。絶対、絶対コイツのせいなのにつ。

「美晴、おなか減ったから、早く食べよう」

ダイニングから聞こえてくる声に、私は小さくため息をつく。やっと純希との生活にも少し慣れてきたと思ったら、またしてもアクマの罠に陥られる。

「この、極悪御曹司っっ」

私はきつく歯を食い縛りながら、あのアクマを蹴り飛ばしたい気持ちを必死で堪えていた……

## 9 昼間の秘書・夜の玩具？　～美晴～

入社して一週間。さて、今日の美晴さんは……

「川嶋さん、このスケジュール表わかりにくいんじゃないかしら？　長嶺部長がきつ

とお困りになるわよ」

「ちよっと川嶋さん、お茶を出した後はきちんと片付けていただかないと次の人が困ります。さっさとなさっていただけない？」

「ねえ、川嶋さん、この銀座のケーキ屋さんで十五時に限定販売するフィナンシェを買ってきていただける？　今日いらっしやるお客様のお土産にお渡しするから急いでね」

長嶺部長、つまり純希の担当秘書となったことが、お姉さま方のご不興を買ったらしく、ねちねちと面倒なことを言われ続ける日々、なわけ。

「川嶋さん、います?」

その上、純希は内線で呼びつけなければならないのに、気軽に秘書課に顔を出しては用事を言いつける……、ってまた来た?

「あら、長嶺部長、ご無沙汰しております」

最初だけ爽やかな笑顔を見せてくれたショートカットの先輩——なきはら 椰原さんが、ドアを開けた純希に軽く会釈して声をかける。

「やあ、椰原さん。今は専務の担当をしてるらしいですね。どうですか、専務の秘書は。僕のとときより、こき使われているんじゃないですか」

にこにこ仕事用の笑みを浮かべて、純希が椰原さんと談笑している。いいですね、御曹司様はお気楽で……。アンタのおかげで、私がどんな会社生活を送っていることか! いや、きつと、想像はついているんでしょうけどね。

「川嶋さん、この後打ち合わせに行くので、同行してもらいたいんですけど?」

イヤですと言える立場じゃないのはもちろん知っているけれど、それでも私は抵抗を試みる。

「申し訳ありません。午後はお客様のお土産としてお渡しする、お菓子を買いに参りま

すので」

「それはほかの人にお願いできかないの? 能城さん、どなたか手の空いてる方に行ってもらおうよう手配してもらえませんか?」

能城さん——一番最初に私に声をかけてきた、あのゴージャスな巻き髪の彼女は、あで やかな笑みを浮かべて返答する。

「ええ、かしこまりました。ではこちらで手配させていただきます」

「は、はい、申し訳ありません」

慌てて頭を下げる私を、絶対純希は心の中で笑っているに違いない。でも、この大変な状況のほとんどを純希が作り出してるってこと、わかっているんでしょうね。

「じゃあ川嶋さん、色々説明したいこともあるから、今から来てもらえますか」

「はい、かしこまりました」

私は純希にうなが 促されて、秘書課を後にした。

純希専用個室、つまりビジネス推進事業部部长室に通されて、私は大きくため息をつく。

「秘書課は、ずいぶん楽しそうだね」

「……羨ましいでしょう?」

切り返しにも冴えがない。毎日あんな調子で、次から次へと雑用を頼まれる私の身に

もなつてほしい……

「午後の打ち合わせは、たいした時間はかからないよ。一緒に食事でもどう？」

「部長、私は仕事で呼ばれただけです。それ以外は申し訳ありませんがお付き合いできません」

会社でまで、純希の好きにされるわけにはいかないのよ！ それじゃなくても、毎晩

一緒にお風呂に入るとか、ひどい環境で暮らしてるんだから、これ以上のストレスは不要。

「美晴の仕事は、俺の面倒を見ることだよ？ 俺が美晴と食事をしたいと言えば、当然

食事に付き合ってもらうし、俺が美晴を抱きたいと言ったら……」

「ちょっと、どう考えてもそれはセクハラでしょ！」

「なんだ、ごまかされてくれると思つたのに」

嬉しそうに純希が笑う。何が嬉しいの、このアクマ！ ちなみに、当然だけど私たちに

カラダの関係はない。そもそも、恋愛を前提に結婚しましょうなんて意味のわからない

言葉を言った純希自身が、私に対して恋愛感情を一切持ち合わせていないんだから。

つまり、夫婦の営みは一切ない結婚生活が続いている。だからといってただの同居人と

言える関係でもない。

「とりあえず、打ち合わせが始まるから、美晴はお勉強のつもりで参加して」

「……はい」

結局、純希の要望のままに、打ち合わせが終わると食事に連れていかれて、そのまま帰宅。……ちゃんと社会人をやれているとはとても思えない。私は玄関で、大きいため息をついた。

「どうしたの、そんなため息つかれたら、放っておけないよ？」

いきなり背後からぎゅっと抱きしめられて、私は必死でそれを振りほどく。

「ほっといて！ っていうか、ほとんど純希のせい！」

「だったらますます放っておけないね。一緒にお風呂に入って、話を聞かせてもらおうかな」

……大好きなお風呂が、嫌いになりそう。なんでこのアクマは、こんなにも一緒にお風呂に入ることこだわってるの！

「ほら、美晴。準備しなくていいのかな？ それとも俺に脱がせてほしい……？」

私の肩をつかむ、純希の手。私はぶるぶると大きく身震いして、その手から逃れる。

「自分で脱げるっ」

「じゃあ、お風呂に入ろうね」

——このアクマの手のひらの上で、好きに転がされているだけなのかも。

私はぐったりしながらバスルームへ向かった……

そして今はバスタブの中。いつもどおり、純希と向かいあって。

「美晴はいつまでたっても慣れないみたいだね」

私の腕を撫でながら、わざとらしく純希がつぶやく。ううう、触らないで、とも言いくいつ。まあ、なんだかんだ言って、結婚式の後のキス以外、私に手を出さないでくれる純希には、多少感謝してる。多少、ね？ 結婚しているのに、いつまでもそういうコトをしないっていうのが、おかしいのはわかる。ただ、私たちの結婚そのものが普通とは違っていろいろのも事実だし！

純希は撫でていた私の腕をつかんで、自分のほうに引き寄せる。私は体を反転させられ、純希の胸に背中を預けるようにして抱きしめられた。こ、こんな露出度の高い格好で、こういう密着はまずいと思うっ。抗議の声をあげようとしたとき、純希が少しほっとしたように息を吐いた。

「ちよっと疲れてるんだ。少しだけ、このままでいさせて」

「う……………ん」

裸の肩を純希の腕がすっぽりと包み込んでいる。細いけれど、私とは全然違うオトコの腕。私の右肩に、純希が額をつけた。私は左手を伸ばして、そっと純希の頭を撫でる。いつも気を張って、『長嶺純希』を演じている彼には、彼なりに疲弊する何かがあるの

かもしれない。

「優しいね、美晴。このまま、俺のものになる？」

「なりません」

「……残念」

心臓がバクバクと激しく脈打っているのは、決して純希のせいじゃない。お湯が熱いのと、男の人とこんなに密着するのが初めてだから、だよ！ こういう言い方をすると誤解を受けそうだけど、これは相手が純希じゃなかったら、絶対無理。純希は、一応私の夫で、私が本当に嫌がることをしないって、私だってわかってる。だから、平気なだけなの！

「ちよ、ちよっと!？」

首筋に、何か生暖かい感触がつ。純希がその部分に唇をつけて、軽く舌を動かしているのがわかる。

「感じてるんだよね？」

「違うわよ、馬鹿っ」

「そうかな？」

キツく吸われて、私のカラダは私の意思に反してビクンと震える。

「美晴は色が白いから、すぐ痕がついちやうね」

笑いを含んだ純希の声が、耳のすぐ近くで聞こえる。やだ、なんかカラダが熱くて、少しおかしい。湯あたりしてる、かも。

「や……」

「そんなかわいい声出さないでよ。我慢するのがつらくなるでしょう？」

何を、とは聞けない。純希は私と結婚した後、ほかの女に手を出すことはしていない、って言ってた。つまり、それって――

「純希、ダメ……」

「わかってる、まだしないよ。でも少しだけ、美晴に触りたい。そのくらいは許してくれてもいいんじゃないかな？」

それを許して、本当に途中でやめてもらえるものなのか、私にはわからない。男の人の、そこらへんどうなの!?

「ねえ、美晴」

「待って、待って純希、本当にダメだと思うの！ だって、ほら、男の人は途中で止めるのもつらいっていうでしょっ」

胸に伸ばされた手をつかみ、私がそう言うと、純希はくすくすと笑う。何よ、なんで笑うのよ。私の言ってることって、何か見当違い？

「俺に触れられるのが嫌だから、駄目って言うんじゃないんだ？」

「あ……」

言われて、自分でもびっくりする。こんな男に触れられるなんてイヤ、とか、そういう気持ちはなかったかもしれない。

「それはいちいち言わなくても、もうわかっていることでしょ！」

でも意地を張るしかない。だって、純希と密着していても、イヤだと思わなくなっているなんて認めるわけにいかないんだ。純希がそばにいるのが当たり前になってきてる、なんて、そんなこと認められないっ。

「じゃあ、直接触れないから、ね？」

「えっ？」

きっちり巻いたバスタオル、ダブルクリップでとめてあるその上から――。私の胸を、純希が優しく揉む。

「だ、ダメ……」

「少しだけ、だから」

「す、少しならいいってもんじゃないっ」

「じゃあ、いっばい？」

こらこらこら、そんなかわいく言っても、アンタがアクマなことはわかってるんだからねっ。なのに、純希が珍しく弱ついているところを見せるから、私は思い切り彼を拒絶